

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4つのヘルプセンターでの保健衛生、教育関連活動、技術トレーニングなどが継続的に実施され、家事使用人として働く少女たちの生活環境が改善される 少女に対する各種の研修等は予定通り実施され、雇用主との関係が良好になるなど、具体的な生活環境の改善が見られた。一方、雇用主の理解が依然として得られずセンターに通えなかった少女、まだセンターの存在を知らずにいる少女たちの潜在的なニーズまで十分に掘り起こせたとはいえ切れない。 ・ 家事使用人として働く少女たちの雇用主とその家族や地域住民に本活動への理解が深まる 十分に理解が浸透したと思われる。雇用主自身が研修のトレーナーを務めたり、センター近隣の地元住民が積極的にワークショップに参加する事例があった。また、住民の意思決定に大きな影響を与える存在である、イスラム教の宗教指導者が本事業に協力と理解を示したことは非常に効果的であった。 ・ バングラデシュ社会に本活動および家事使用人として働く少女たちの現状について、メディアや同様の活動を実施する NGO・国際機関との連携を通じて広く伝わる バングラデシュ国内の主要な新聞に本事業の取り組みが取り上げられた事例があった。しかし、未だバングラデシュ国内では家事使用人として働く少女が存在する現状と、それを生み出し、受け入れる社会構造が根深く存在するため、引き続き少女への支援並びに彼女たちを取り巻く環境への変化を促すアプローチを継続していく必要がある。
(2) 事業内容	<p>家事使用人として働く少女たちが暴力や性的虐待、搾取、仕事中の事故から守られ、心身共に健康に成長し、自らよりよい将来を描けるようになるために以下の事業を行った。</p> <p>①インフォーマル教育 簡単な読み書き計算から自分たちの生活に関する保健衛生について学ぶ機会を提供。また、演劇やダンスなどを学ぶ機会を提供し、少女たちが健やかに育つに資する事業を展開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ⇒ダッカ市内 4カ所（コライル、パイクパラ、アジンプール、ルプノゴール）において、少女たちのためのセンターを運営した。 ⇒簡単なベンガル語や英語の読み書き、算数を学び、保健衛生に関する知識を学んだ。 ⇒性に関する知識として、思春期の体の変化や生理の対処の仕方、性的虐待防止のワークショップなどを実施した。 ⇒演劇、ダンス、音楽、絵画教室を実施した。 ⇒アジンプールセンターにて 4センター合同のスポーツ大会を実

施。86名の少女が参加した。

②医療支援

子どもたちの状況に応じ、破傷風の予防接種を実施した。また消毒液などの提供。身なりを清潔に保つことの大切さを学んだ。

③スキルアップトレーニング

少女たちが効率よくまた上手に仕事が出来、雇用者との関係が良好に保たれるために家事に関する研修を実施した他、将来別の職業につくことが出来るよう縫製、プラスチックファイバー製品製作研修等も実施した。

⇒100名以上の少女が、洗濯、掃除、家電製品、アイロンがけおよびその手入れ方法に関する研修を受講した。

⇒4センターで合計17回の調理研修を実施し、357名が受講した。

⇒裁縫研修で学んだことを生かして、自分で服を縫ったり、副次的な収入を得る仕事をした。

④雇用主及び地域住民等への啓蒙活動

雇用者と少女たちの良好な関係を築く目的と、児童労働防止や子どもの権利に関して、雇用者や地域住民といった少女たちを取り巻く大人たちへの啓蒙活動をワークショップと個別訪問形式で行った。

⇒雇用主と少女の保護者の戸別訪問を実施した。この戸別訪問を通じて新たに84名の少女がセンターに通うようになった。

⇒「子どもの権利ワークショップ」を4カ所のセンターで計6回実施（2011年7月21日、同28日、2012年6月18日、同20日、同25日、同27日）し、計72名の雇用主が参加した。

⇒イスラム教の宗教指導者に対するワークショップを2回実施（2011年7月26日、同31日）し、計12名が参加した。宗教集会で児童労働防止や子どもの権利、家事使用人として働く少女の現状を地元住民に情報共有するように促した。宗教指導者と本事業の目的を共有したことで、少女への虐待など家の内部で起こる暴力への抑止力となった。

⇒地域住民への働きかけとして地元学校の保護者に向けて、家事使用人として働く少女の現状と子どもの権利を共有するためのワークショップを4回実施（2011年7月20日、同27日、2012年2月23日、3月19日）した。合計で140名の保護者が参加した。

⑤社会へ広く訴える活動

家事使用人として働く少女の現状が広く社会に訴えかけられ、社会全体に変革を促すような活動を実施した。

⇒家事使用人として働く少女たちの現状や子どもの権利、児童労働に関するリーフレットを作成、配布した。

⇒国内の主要紙で家事使用人として働く少女に関する記事が3つ掲載された。

	<p>事業担当者、専門家による現地モニタリング訪問</p> <p>内山智子：2011年10月（担当者モニタリング）</p> <p>藤崎文子：2011年12月（担当者モニタリング）</p> <p>筒井哲朗：2011年12月（専門家モニタリング）</p> <p>筒井哲朗：2012年2月（専門家モニタリング）</p> <p>藤崎文子：2012年4月（担当者モニタリング）</p> <p>齋藤美香：2012年6月（担当者モニタリング）</p>
(3) 達成された効果	<p>本事業の目的として、以下の3つを設定していた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 4つのヘルプセンターでのクラスが継続して実施され、家事使用人として働く少女たちの生活環境が改善されることインフォーマル教育の機会を提供すること。 2. 彼女たちの雇用主と家族、地域住民に彼女たちが置かれている状況への理解を深めてもらうこと。 3. バングラデシュ社会に本活動および家事使用人として働く少女たちの現状について、メディア等との連携を通じて広く伝えること。 <p>また、事業当初に想定した裨益者数は次のとおり。</p> <p>家事使用人として働く少女 200名</p> <p>少女たちの雇い主とその家族 約800名</p> <p>少女たちの家族 約800名</p> <p>少女たちが働く地域の住民 約3,500名</p> <p>1の目的達成のため、インフォーマル教育（読み書き、計算、保健衛生教育等）とスキルアップトレーニング（アイロン、掃除、料理）を実施した。その結果、本事業期間中、新規に193人の少女がセンターに通うようになり、大多数の少女が簡単な読み書きができるようになった。ベンガル語だけでなくアルファベットやアラビア数字の読み書きまで学習した少女も多数おり、事業当初目標としていた「40人の少女が簡単な読み書きができるようになる」といった指標を大きく上回る結果となった。また家事のスキルをセンターで学び、それを勤め先の家事に生かす少女も目立った。少女たちはアイロンの適切な使用方法を学び雇用者の服を破損することがなくなり、センターで学んだ掃除や調理の知識を勤め先で実践し、雇用者との関係が良好になった少女もいた。彼女たちは家事の空いた時間などを利用し、センターで学習したアクセサリーやバッグを製作販売して、副収入を得られるようになった。指標では「センターに通う少女の3分の1以上が追加的な収入を得られるようになる」と設定していた。詳細な数字は明らかにならなかったが、センターで学んだスキルを生かしてアシスタントとして縫製工場で働き始める少女が継続的に副次的収入を生み出すケースや、センターの絵画教室で学んだスキルで雇用者の子どもに絵画を教え、追加の給料を得</p>

	<p>られるようになった少女もいる。また、継続的ではないものの近隣の住民から注文を受け、アクセサリーの製作販売を行い月約 200TK の副収入を得た少女もいる。</p> <p>2 および 3 の目的を達成するため、啓蒙活動や個別訪問を実施し、雇用主が少女たちに対する認識を改めることで、「彼女らに対する暴力および不当な扱いが減ること」と「20 名の少女が新たにセンターに通うようになること」を目標として設定した。彼女たちがセンターで学んだことを勤め先で実践することで仕事中の失敗が減り、より質の高い家事労働を提供できるようになることで、雇用者の少女たちを見る目が改まり、彼女たちの尊厳が守られることにつながった。なお、個別に訪問した雇用主の数は、当初の目標を大きく上回る 1,622 人、保護者の数は 699 人だった。雇用主への訪問数が増えたのは、理解を示さない雇用主がそれだけ多かったことの証左でもある。</p> <p>また、家事使用人として働く少女たちの現状が広く社会に訴えかけられ、社会自体に変革をもたらすように指標として「本事業がメディアに 15 回取り上げられる」と設定していた。成果としてはバングラデシュ国内の主要紙に 3 回掲載されるに留まった。この背景としてはメディア向けのワークショップや国連や児童労働防止を掲げる他の NGO との連携が実現しなかったことによると考えられる。</p> <p>本事業で、少女たちが自ら学ぶ意欲を培い、学んだことを実践し、自分の力でよりよい将来を手に入れるために奮闘できる環境を作り出したことをさらに持続的な成果につなげるため、雇用主を含む地域住民、ひいてはバングラデシュ社会全体への働きかけの必要性が、より明確になったといえる。</p>
(4) 持続発展性	<p>本事業では、家事使用人として働く少女たちが健やかに成長できるような機会を提供すると同時に、彼女たちを生み出すような社会自体に変化を求めていくことを考えていた。日常的なセンター運営はパートナー団体である Phulki が中心となっているが、この団体はベンガル人が作った地元の NGO であり、ここと協働することで、バングラデシュ社会の中で持続的に影響力を保ち、将来的に家事使用人として働く少女がいなくなることにつながるものと考えている。</p>